田端：最初に分科会毎あった発表を、座長から簡単に説明いただく。その後テーマ絞って議論をしていきたい。

森重：観光交流分科会だったが「交流」のイメージが強かった。地域資源やコミュニティの内容も多々あった。演劇も交えながら非常に興味深い分科会となった。

1つ目の木津川アートプロジェクトでは市町村合併を機に、アートを使って地域の一体感をどう高めていくか、市や観光協会、プロデューサーが一体となり、アートで地域おこしをしようという発表だった。

2つ目の新今宮地区での観光まちづくりでは、従来のアイリーン地区だけではなく、道頓堀や通天閣・阿倍野を含む新今宮地区で感動まちづくりを進める。新今宮を外国人観光客の拠点にしていくと同時に、色々な地区を結びつけていくためにどういう風な取り組みをすればいいかという発表だった。

森重：3つ目の京丹波町の取り組みは、就労支援をしながら地域の産品、仕事をどう作っていくかを発表。実際に畑を借りて生産、作ったものを販売していく中で、独自産業化をどのように進めていくか報告があった。

4つ目の鶴見商業高校の発表は、非常に面白いものだった。地域の中でプロジェクトチームをつくり、パンやせんべいを販売。地域の人と連携しながら、商品企画や販売実習をすることで、地域活性化に取り組んでいるという発表。

5つ目のA-yan!!は昨年度も発表頂いたが、ゆくゆくはシルクドソレイユを目指し、最強お化け屋敷の展開についての発表だった。

地域の資源や人を使って、価値をどのように作っていくか、高めていかが共通事項として上がった。その時に「交流」がキーワードとなっている

スマイル賞は「大阪市立鶴見商業高校」が受賞。

横山：地域資源活用部門では色々な方面からの発表があったが、それぞれがつながりそうな予感がする発表会だった。今後の行く末が面白く思えた。

1つ目は京都駅周辺地域のまちづくり活動では、モンゴルからの留学生が流暢な日本語で発表してくれた京都駅北側の東本願寺と西本願寺がある地区で、まちづくりをしっかりし、新しい京都の魅力を発信する取り組みについて発表した。発表者が外国人だったこともあり、日本独自のゆるきゃら文化に驚いていた。学生・留学生の視点が入り、本当のグローバルな京都観光がつくりだせる匂いがした。

2つ目は水軒堤防の再生と市民の公園の実現ということで、水軒浜は和歌山県の
南西にある。昔は海水浴場で、松が植えられとても綺麗な景色がある場所だった。
しかし、海水浴場が埋め立てられると景色が一変した。その時松並木の利用がほったらかしになった。松並木の再生だけでなく、みんなが利用できる公園にしようと
活動が始まった。清掃活動だけでなく、健康遊具やドックランの設置も行った。県
や市へも協力依頼し、積極的な取り組みを行っている。

3つ目は、阪南大学の学生による発表。外国人の簡易宿舎が増えたことと、東日本大震災で福島から避難してきた方との取り組みを行っている。避難者の把握やこ子どもたちを喜ばせることなど、地域を駆け巡って情報を集めた。これからどんどん、進化・深化・真価を常に問い
続けて、新今宮を中心とした観光開発をしていきたいという力強い言葉で締めくくられた。

横山：4つ目は、山添村での耕作放棄地の資源を活用したむらづくりという発表。山添村は大和茶の生産地。茶の木が放置されている土地もあり、それを使って何かできないかという取り組みをしている。代表的なものとして、お茶の木を炭にするということ。炭づくり体験プログラムの企画をしたり、山菜とりをしてみんなでその炭を使ってバーベキューするなどしている。また、村の名産づくりの一貫として、さつまいもを育てるなどしてみたが、草が生い茂っていたこともあり、あまり収穫数が上がらなかった。そこで、羊の除草隊を結成した。他の地域にも出張するなどエコな除草活動を行っている。その他、茶の実から油を抽出するなどお茶の木の活用に取り組む。

5つ目は、東竪町のまちづくり、伝統文化の継承と発展 猿楽能と町衆という発表
以前にも発表して頂いた際、非常に美しかった切り絵の細工も見せていただけた。猿楽についての研究をまちぐるみで行っている。また制作している町会誌が色々な人々をつなぎ、しっかりと文化を掘り起こすネットワークの役割を果たしていることが印象的だった。猿楽の質疑応答時、城東区で猿楽について掘り下げている方がいた。この場所で、つながりができ連携していけると面白い。次の道筋が見えるような発表だった。
スマイル賞は「里楽」が受賞。

田端：内容としては、コミュニティを守っていくことはまちづくりそのものなんだなぁと非常に小さい単位で取り組んでいる活動が多い。

1つ目は、星田山手ボランティア・街づくり推進会の発表。自治会の機能が低下する中で、ボランティアがその役割を担って、活動を支えていくという内容。お祭り等イベントや川の整備（掃除や桜の植樹）を進め、行政頼みではなく自分たちで活動資金を集めていこうと取り組んでいる。

2つ目は、箱の浦自治会まちづくり協議会の発表。この場所はオールドニッポンと言われている地域で、高齢化率33%。そこで高齢者の方に居場所を作ろうと、公的な施設の中にサロンを作った。しかし集まりが悪かったため、民間の住宅を何とか借り、集まりやすい環境で行った。週3回開かれる会に毎回40名ほどの方が参加されるようになった。お金の心配もあったが、趣旨に賛同していただく方のご協力で集まるようになった。特徴は、コミュニティソーシャルワーカーが活動を支えている点。

3つ目は東竪町自治会による発表小さな自治体ではあるが、活動内容はしっかりしている。ゴミやCO2などの環境問題に注目した取り組みについて報告した。ゴミの分別など簡単にできるが自主的にやるためには意識を変えることが必要。啓発活動を積極的に行ったり、廃油を使った石鹸づくりなどをしている。環境専門のNPOと連携し、CO2排出量の計測などを行っている。

4つ目はパパの育児休業支援センターによる発表。昨年度も発表した団体。今年は「こども未来フォーラム」の内容について報告した。1つの団体だけで社会・地域を変えていく（ソーシャルチェンジ）のは難しいことを強調。

田端：地域看護や在宅介護など地域単位で行うものに、地域と介護を必要とする人をつなぐコミュニティソーシャルワーカーは重要。看護・介護も地域の力を活用しながら、社会を変えていきたいという想いで活動している。

5つ目は京丹波町スポーツ少年団の発表。この少年団は友好町の双葉町支援を行っている。活動内容はじゃがいもづくりなどを地域の人と一緒に実施。力づけられる側の地域のためだけでなく、力づける側の地域にも、人材育成や地域や防災への興味関心を高めるなど貢献している

6つ目は防災かまどベンチ実行委員会の発表。防災かまどベンチとは日常はベンチとして使い、有事の際はかまどとして使用できるもの。神戸や東北でも実際に使われており、地域で何かあっても大丈夫ないように設置を計画。7つの自治体が協力し、1機35,000円ほどする防災かまどを設置。今後も定期的に増やしていく予定。小さな地域の小さな取り組みが積み重なって、いずれ大きなムーブメントになる。将来を見据えながら進められればと思う。

スマイル賞は「箱の浦自治会まちづくり協議会」が受賞。

田端：この報告会も数回開催してきたが、何度かお顔を合わせた方が再度きてくれている。それぞれに発展・進化しており、継続は力なりと思い聞いていた。
3つの分科会に分けたが、その中間にあたるテーマ、キーワードがある。これまで以上に地域づくり・まちづくりが多様化している。
地域をキーワードにして、経済・防災福祉が分けられないぐらい絡み合いながら存在している。そこに共通するのは「人」。住んでいる人達の想いが重要。

大南：星田山手の活動の中で、アドプトリバーの報告があり感慨深い。1998年に神山で初めてアドプトをやりはじめた時に、大阪府はとても熱心で、2年後にはきちんとしたプログラムになっていた。そうした中で、星田山手の活動の核としてアドプトがあることが嬉しい。
東京R不動産は、物件案内時に暮らし方を案内している先進的な不動産屋。そのプレス担当者が、「人は物事を判断する時に、直感的に判断している。人が楽しそうにしていたり、人が集まっているだけで、その地域の価値はあがる」」と言っていた。今日の発表でも発表者が楽しそうにしているのが印象的だった。そのことが、地域づくりのスタートとなる。
新今宮の発表の中で、人（大阪のおばちゃん）が一番面白いという発表があった。各所に道の駅があるが、人の情報が得られる「人の駅」が地域には必要。そういう地域は濃い情報が提供でき、思い出にのこる場所となる。いきなり社会を変えるのは難しい。小さなことを繰り返すことで少しずつ変化する。軽いフットワークでやってみることが重要。

田端：広報や連携、活動の継続、資金、人材育成など共通の悩みがある。人の育成について何か議論はありましたか。

森重：具体的にはなかったが、フットワーク軽くとにかく動くということは、それぞれの活動に共通してあった。地域が動くことで、活動に参加することが楽しい、何か起こることが面白いなど、笑顔がうまれる。また継続には資金が必要だが、まず楽しもう、まず何かを起こそう、とにかく笑顔を作ろうということには、大きな活動資金がなくても継続していけると思う。そのために最初の一歩が踏み出せる地域の素地、寛容性をつくることが重要と思う。

横山：この場に人を育てている人と、育てられている人がいる。せっかくなので、育てられている人に話を聞いてみる。

会場：高校3年生の時にはじめて新今宮に降り立った時、思っていた場所と違った。そして今、新今宮で外国人の方を案内していると、町や人の流れが変わってきたことをすごく感じる。松村先生のもとでまちづくりや観光のことを学び、これから自分がどのように地域や大阪を変えていけるかをよく考える。今日は限界集落の地域が活性化していく事例を教えてもらえたので、これからも自身の関わり方を考えていきたい。

会場：学生も地域が変わることが楽しい。こういう場に参加して発表することで評価をいただける。そのことが次への励みになる。また学生が循環する仕組みがあるので、地域がどんどん変わっていける。就職後も自分が置かれた状況の中で、どういう風にしたらいい方向に変わるかを考え行動していってもらえれば、嬉しい。教育者として幸せ。

横山：地域づくりにおいて人に触れることは必須。人に触れることを積極的に行っていることが、これからの社会にとっていい影響が出る。

会場：教室での授業は思い出に残りにくいが、TICに立って外国人の対応をした記憶は全部のこる。記憶と経験が積み重なるのがとても良い。

会場：2006年に日本に来て、色々な活動に参加していく中で、外国人から見ると、京都は観光地。PRには清水寺など決まってものが使われている。しかし、伝えきれていない魅力がたくさんあることを知った。今回発表する機会をいただいて、人生においてとても勉強になった。

田端：社会を変えていくにあたって、若い人たちをどうコミットするのか、増やしていくことの重要性は問われる。少年団の事例では、少年達が被災地にいくことで、社会と関わる重要性を知る。こういった人材育成の要素を作っていくことが必要。

会場：若い人を呼ぼうと思うと、こどもをターゲットにすること。同時に新しい人を発見する場をつくること。この2つが人材育成には必要と思う。

田端：1歩踏み出す機会をふやすこと、若い人をどう巻き込むかを考えること、それが社会・地域を変えていく原動力につながる。